

「スマイリーという原点、 SMILYBASEという入口」



長田電機工業株式会社
名古屋工場

杉本 清 工場長

「自分にとって スマイリーシリーズとは」

ユニットづくりの話になると、
「デザインって大事ですね」
と言われることがあります。

そのたびに、私はこう答えています。

「デザインは大事。
でも、何より使いやすさです」。

医療機器は、毎日、何年も、患者さんと術者を支え続ける道具です。見た目が良くても、使うたびに無意識の負担が積み重なるようでは、現場にとっていい道具とは言えません。

デザインは入口としての役割はあるけれど、主役ではない。あくまで、商品の価値を引き立てる存在だと考えています。

私は入社して最初の5年間、工場でユニットの椅子下台・上台の組み立て、検査、生産技術に携わっていました。ラインを流れる椅子を毎日作り、検査で一台一台の動きを確かめる。

その中で強く感じていたのが、

「操作のために力や意識を使わせる設計は、現場ではストレスになる」ということでした。その後、椅子の設計を一貫して担当するようになり、最も技術を学ばせてもらったのがスマイリーシリーズです。

入社38年、
開発現場で腕を磨いてきた技術者。
長年OSADAのものづくりを
支えてきた杉本氏に、
スマイリーについて率直な想いを
インタビューしました。



当時のOSADAには、
バックレストを油圧で動かす技術が
まだ確立されていませんでした。
だからこそ挑戦する価値があった。
試作しては壊し、直して、また考える。
その失敗と改良の積み重ねが、
今のOSADAの椅子機構の土台になっています。

私にとってスマイリーは、
「自分の技術の原点」であり、
「今につながる基礎をつくった場所」です。



1991年発売
オサダスマイリーノーベル



1998年発売
スマイリーGM8001



OSADAと出会う最初の一台 — OSADA SMILY BASE

新商品、SMILY BASEも、
考え方の根っこは同じです。

SMILYBASEは、
OSADAと出会う入口になるユニット。
でも、入口だからといって「手を抜いていい理由」
にはなりません。
むしろ入口の商品ほど、困らせない・迷わせない・
頑張らせないというOSADAの誠実さが、にじんでき
なければならないと思っています。

そのために、SMILY BASEでは機能を見直しました。

- ・大柄な患者さんでも肩が落ちず、はみ出さず、
しっかり支えられるバックレスト形状
- ・術者の視界や動きを妨げない
ヘッドレスト形状
- ・アシスタントが移動せずに患者さんのポジション
変更を操作できるスイッチの追加。
操作を意識せず、診療に集中できる動線と操作性



これらは「ついている・ついていない」の
話ではありません。

先生の診療そのものを支えるために外せない機能で
す。

もちろん、見た目にも応えたいと思いました。
それは、新しさを感じてもらおうきっかけとして
必要だからです。



そこで採用したのが、白×黒のツートンカラー。
暗くなりすぎないように、テーブル、チェア、
スピットンなど、一箇所ずつ黒をアクセントとし
て効かせています。あくまで主張しすぎない、
スパイスとしてのデザインです。



※把手の黒塗装はオーダーメイド品です。

私の理想は、OSADAのユニットを知らない先生の
選択肢にSMILY BASEが入り、そこから他のシリー
ズにも目を向けてもらえること。そしてその先
で、「OSADAのユニット、いいな」と自然に思っ
てもらえる理由が生まれることです。

長くユニットづくりに関わってきた中で、正直に
言えば、社内でもかなり思い入れは強いほうだと
思っています。自身の子供だと思っています。

だからこそ願っているのはただ一つ。
現場で、元気に、長く、自然に先生の
お役に立ち続けてほしい。それが、ものづくりを
してきた人間としての、率直な願いです。